

## 会長からのご挨拶

街中の道案内板をふと見上げると、「グアム 1750 km、サイパン 1270 km、沖ノ鳥島 1440 km」などと書かれている町があります。世界自然遺産の一つ、東京都小笠原村母島です。母島は東京都心から 1030 km ほど南にあり、460 人ほどの方々が玄関口の沖港近隣で生活されています。母島から北に 50 km のところには、内地との玄関口で、同じく世界遺産の父島があり、2130 人ほどの方々が二見港近隣で生活されています。小笠原の緯度は都心よりも約 9° 赤道寄りになります。都心が最高気温 35~36°C の猛暑日でも、小笠原の最高気温は 30~32°C の真夏日で済んでいます。東京消防庁の管内では、年間で 4000 人ほどが熱中症による救急搬送を受けているようですが、小笠原村診療所に訪れる熱中症患者のほぼすべては内地からの観光客で、島民は熱中症と無縁の昔ながらの日々を送られているようです。これらの違いは、どこから来ているのでしょうか？

熱中症の遠因の一つは、ヒートアイランドによる都心の気温上昇だとされています。ヒートアイランドは都市の人口やエネルギー利用密度の増大、人工構造物による熱容量の増大、宅地開発や舗装化、河川の埋め立てなどによる水分蒸発面積の減少、人工構造物による風の流れの停滞、都市上空の水蒸気の温室効果など、種々の要因が複雑に影響し合い、発生します。このため、ヒートアイランド関連研究は、理学（気象学、都市気候学、地理学、大気環境学）、工学（建築学、機械工学、環境工学、土木工学、計測工学）、農学、医学、経済学等様々な領域に亘りながら、統一的な解釈、学問的統合が後手に回ってきました。また、各自治体等で実施されている種々のヒートアイランド対策も、技術の類似点が多いにもかかわらず情報交換の機会が限られ、相互の知見を活かすことが難しい状況です。

本学会は、従来型の学術的なサロンではなく、大学・研究機関、国・自治体、企業、個人・NPO・NGO・市民団体等の関係者が対等な立場で集い、研究、技術開発、導入普及、啓発、教育等を連携しながら進めることを目指して 2005 年 7 月に設立されました。2015 年 7 月で設立 10 周年を迎えます。現在は全国大会始め、プライムセミナー、エキスパートセミナー等を定期的で開催し、Web ジャーナルを発刊し、ヒートアイランドの研究成果、開発技術の紹介、勉強、交流の場を提供しています。

この間、2004 年策定のヒートアイランド対策大綱が 2013 年に改定され、当時の 1) 人工排熱の低減、2) 地表面被覆の改善、3) 都市形態の改善、4) ライフスタイルの改善等の内容に加えて、5) 人の健康への影響等を軽減する適応策の推進が新たに追加されました。設立 10 年を迎えるとはいえ、高温化の傾向は変わらず、熱中症患者が多発するなど健康被害が顕著になるばかりで、本学会が真に意味ある団体と言えるのかどうかは、今後 10~20 年の学会活動とその成果にかかっているととも言えます。

学会での活動、情報交換は、まず学会行事に参加することから始まります。本学会に必要なのは専門家だけではありません。対策技術を実施する個人の力を何よりも重要なものと考えています。是非学会に参加し、ともに楽しみながらヒートアイランド対策を推進する力となっていただくことを切望いたします。

2015 年 6 月 1 日      日本ヒートアイランド学会会長  
平野 聡